長洲町立長洲小学校　校長便り　No.４２

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和４年１０月２１日(金)

【雑感】働き方SP

休日は心身を休める日であるが、私は休日の使い方がとても下手だ。いつもあっという間に過ぎる。遊びの計画をしていても、教師の性というか、いつ何時も仕事のことが頭から離れないのだ。これではプロとはいえない。何故なら、教師の仕事は「休む」ことも含まれるからだ。仕事にメリハリを持たせ、休む時は徹底的に休むことで、子供達への接し方も変わる。笑顔も増える。ダラダラと仕事をするとミスも増える。ミスや心配事が増えると笑顔が減り、子供達へ影響が出る。

子供達や保護者は我々教師に何を求めているのか？　元気ではつらつとした姿なのではないか。私自身、教職に就いた頃は遊び惚けていた、しかも夜通し。それでも朝から元気に？出勤し、子供達と向き合っていた。エネルギーに満ち溢れていた。

５０歳を過ぎて本来の働き方、生活の仕方を改めて考え、仕事人、組織人として、自分を振り返っている。

働き方改革

世の中に「働き方改革」が叫ばれ始めてかなり時間が経ちました。これまでにも私は働き方改革＝意識改革だと訴えてきました。一般的な働き方改革の目的は「一人ひとりの意思や能力、個々の事情に応じた、多様で柔軟な働き方を選択可能とする社会を追求していくこと」で、労働者にとっての働きやすさを実現していくことです。働く意欲のある人が無理なく働けるようになることで、社会全体にとっても良い影響が期待できる、という訳です。我々教師にも同じことが言えます。しかし、更に言っておきたいのは、業務改善と労働時間の削減により、子供達と向き合う時間を確保することが重要なのです。教師の働き方改革とは、我々教師がラクをするのではなく、教師の本来の立ち位置に戻ることなのです。業務の無駄を削ぎ落し、本来業務に費やす時間を産み出すことが重要なのです。

今でも働き方改革ができている人はできていました。どれだけ仕事が増えようと、業務にかける時間は同じで、そして確実に成果を上げていく人もいるのです。私もそうありたいと願う日々です。

遊びも改革！

最近、どの企業や組織も「働き方改革」が叫ばれ、勤務時間の短縮や業務の効率化が実施されています。働き方改革って結局のところ、個人の意識改革だと私は思っています。何故なら、誰でも自分の趣味や息抜きはしていますからね。（本来、学校の働き方改革は、業務改善によって子供達と向き合う時間を確保することに重きをおいています。）私もそうです。業務の改革を図り、捻出された時間は、子供達と向き合い、そして更には家族と向き合い、そして更には趣味の時間に費やしています。

先日、プラモデルを作っていたら、途中接着剤や塗料を乾燥させる時間がもったいないことに気が付き、隙間時間を作らないようにするために、別のプラモデルを並行して作るようにしました。塗装色が同じものを複数個制作することや、同じ作業を同時に行う等によって、作業の効率化も実現しました。結局製作にかかる時間は殆ど同じで、複数のプラモデルが一度に完成しました。これぞ改革だと感心してしまいました。仕事は3つほど並行すると効率が良いようです。

この後、家族からは「また遊びよる…」と不満が…。産み出された時間の振り分けが課題となっています。

シリーズ「自分を語る」#４２

私が嘉島西小学校の1年目に担任させて頂いたお子さんは先天性の病気で、胎内での何らかの異常により脊髄が背柱の外に出て、癒着や損傷を起こしている状態でした。その影響で下半身の麻痺や変形、膀胱、直腸の機能が低下していました。歩行もできましたので、学校での生活は殆ど交流学級で過ごし、国語と算数の学習を私とマンツーマンで行っていました。お子さんの実態から通常の教育課程を実施していましたが、今考えてみれば、このお子さんに将来、日常生活を送る上で必要な「何か」をもっと伝えなければならなかったような気がしています。このお子さんは今では４１歳？で、元気に働いていますが、下半身の麻痺がある関係で、排泄のコントロールを自分で行う必要があります。自分の身を守るために必要なことなのですね。現在では、特別支援学級の教育課程の中に「自立活動」が位置付けられています。この活動の中で将来身に付けておくべきことを、学習を通して身に付けていくのです。

話が難しくなると面白くありませんね。とにかく、私にとってこの1年間は、「個人」の教育に対するニーズをどのようにして炙り出していくか、そのことに集中して取り組むことのできた1年でした。

さて、嘉島西小学校での1年目、特別支援学級を立ち上げ、更には交流学級の担任が初任者だったために、交流学級の仕事までさせて頂くようになっていました。担任の先生と協力して、PTA行事を行ったり、担任させて頂いた子の療育キャンプに参加したり、二足のわらじで積極的に動き回りました。「楽しかった。」「悔いはない。」と思える1年を過ごすことができ、黒石原での教え子達に感謝しました。子供達が楽しく過ごすことのできる「居場所」づくりに専念することのできた1年でした。

嘉島西小2年目突入、澤田敦27歳の春です。

春休みのある日、校長室に呼ばれ…

「澤田先生、特別支援学級の立ち上げについては、有難うございました。交流学級の子供達ともとても仲良くなって頂き……云々。来年度もお願いできますか？」

私の希望は通常学級担任をさせて頂くことでしたので、この時は恥ずかしながら、しばらくの間、こねてしまいました。組織人としての自覚が足りなかったのです。

次の日、この時点で私はてっきり、特別支援学級担任2年目と思っていました。

再び、校長室にて。

「澤田先生、先生のお気持ちはよく解りました。しかしながら…云々…という訳で、今年は○○さん（支援学級児童）の交流学級の担任をお願いします。」

「えっ・・・？」早い話が、○○さんと交流学級のどちらも見てくださいとのことなのでしょう。保護者との連携もうまくいっていましたし、私にとっては願ったり叶ったりでした。特別支援学級でもやり残したことがありましたし、通常学級の担任は私の念願だったからです。学校としても交流学級と支援学級の隙間を埋めるという視点で考えた場合、一石二鳥だったのでしょう。このような視点が持てたのは、黒石原養護学校での経験があったからかもしれません。そして、この2年間が、私の高学年担任オンパレードの始まりとなっていきました。

（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　　可　・　不可　）